the world for you

RAN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｔｈｅ　ｗｏｒｌｄ　ｆｏｒ　ｙｏｕ

【Ｎコード】
Ｎ２４４２Ｔ

【作者名】
ＲＡＮ

【あらすじ】
世界を創造した、神と呼ばれる少年と、不思議な存在感を持つ少女。
彼と彼女の出会いは運命づけられていたのか。
それは、悲しい運命だったのか。

※サイト、ｄノベ転載

isolate the world

「ねぇ、神様の奥さんってどんな人なの？」
公園の鉄棒にぶら下がっていた、三つ編みの茶髪に猫の耳を持つ少女アミが何気なく口にした。
隣の一段低い鉄棒につかまっていた猫の耳の少女と同じような容姿に、うさぎの耳を持つ少女ラミも、興味ありそうに、神と呼ばれた少年の方を向いた。
「教えらんねぇなー」
一番高い鉄棒の上に腰掛けている神と呼ばれた少年は、二人を見て、口の端を持ち上げ、ニヤリと笑った。
「んー、何でさー」
アミが口をへの字にして、不満そうに言う。
「何でも」
少年はニヤニヤ笑いを変えないままだったが、口調は言い聞かせるように、落ち着いたものとなる。
「ケチー」
アミは語尾の「い」の音をやたらに強調して、少年を睨んだ。
「ケチで結構」
少年はアミのその様子を見て、ますますおもしろそうに笑顔を深めた。
そして、さらにおちょくるような口調で言う。
「もう！　みんなに神様の奥さんは実は岩なんだって言いふらしちゃうよ！　行こう！　ラミちゃん！」
ついに怒ったアミは、隣のラミの手を引っ張り、公園から去っていった。
少年はそれを、少し困ったような笑顔で見ていた。
どことなくそれには、切なさも混じっていた。

「よぉ、ちゃんと留守番してたか？」
自分の家に戻った少年は、家の暗がりの中にいる人物に向かって声をかけた。
「うん。おかえり」
奥に座っていた女性は、少年に気づいて、長い黒髪の女性が淡く笑って出迎えた。
少年は、彼女に近づき、彼女の艶やかな髪を撫でた。
いとおしげに、ゆっくりと。
「……お前は、ここから出ちゃ、ダメだからな……」
少年は、女性から手を離しながら、静かに言った。
「……わかってるよ」
「……あぁ……」
少年の声は、少し沈んだ。

――お前だけが、俺のものだ――

少年は、一旦離れた手をまた女性に近づけ、その髪を一房、ぎゅっと握りしめた。

「神様ぁー」
ラミとアミが、ＭＺＤの住む家に来た。
「おぅ、どうした」
少年が家の屋根の上からアミとラミの姿をみとめた。
「いや、どうした、じゃないでしょ」
少年の反応に、ラミは苦笑を浮かべ、アミは思わず素でツッコんだ。
「何が？」

少年は本当にわからない、という風に言った。
少年は演技でもサラっとそういう顔ができるので、アミはイライラしつつ、探るような目線で言った。
「このあいだ、そこの川すごい洪水だったじゃんー。神様の家もすごいことになってるし」
「あぁ、これは元からだ」
少年は相変わらず屋根の上から言う。
「いや、元からすごかったけど、ちょっと尋常じゃなくなってきてるよ」
アミがそう言った時、ラミは少年の様子がおかしいことに気づいた。
「……神様、どうかした？」
素直に、疑問を口にする。
「別に、どうもしないさ」
少年は答える。だが、アミもラミの感じた違和感に気づいた。
「なんか目が泳いでませんか」
声は自然と単調になる。
「そんなことはない」
少年はあくまで素知らぬフリをした。
「へー」
まるで心のこもってない返事をアミはする。
「何だよ」
疑わしげに見てくる二人に、少年も睨み返す。
「別に。……そういえば、一人で片付けして大変じゃない？」
アミも負けじと睨み返した。
が、急に笑顔になり、明るく言った。
「いや、大したことじゃない」
その様子に安心したのか、少年も雰囲気を崩した。
――だが、

「そんなこと言わずに、手伝ってあげるよー！」
次の瞬間には、アミとラミは一気に少年の家の中へ駆けていく。
「いらん！……って、勝手に入るな！」
少年はその二人を見て、慌てて、屋根から飛び降りる。
「入っちゃえ入っちゃえー！」
アミとラミは入り口なのか、壁なのかわからない隙間から、家の中へどんどん入っていく。
地上に着地した時には、アミとラミは家の中の方へ入っていってしまっていた。
「こら！　お前ら！」
一応そう叫ぶが、間に合わないと少年は感じた。
「くそ……出るな！」
そう感じた少年は、奥の人物に向かって、声をあげた。
その響きには、悲痛なものがあった。

「……？」
アミとラミは、普段聞いたことのないような少年の声を聞いて、思わず立ち止まった。
だが、その時に、自分達の前に誰かいる気配がして、そちらを見た。
そして、少年が会わせたくなかった人物と顔を合わせた。

「……」　「……」

両者ともに、薄暗がりの中で、驚いた顔をして、相手を見ていた。

「おい」
その固まる両者の間に、ＭＺＤはふわりと飛んで降り立った。
彼の顔には、不思議に色がなかった。

「この人が、神の奥さん？」
ラミは固まったまま、口だけ動かして聞いた。
「……あぁ、そうだよ」
色がなかった少年の顔に、苦いものが宿る。
「あ……ラミさん……とアミさん？」
女性は、状況がわかって安心したのか、その顔に微笑みを浮かべた。
それは、まるで花が咲くようだった。
彼女の髪のてっぺんには、髪が不自然に立っていたが、驚いた時はピーンとはっていたそれが、少し丸くなった。
外見の美しさと妙なミスマッチを起こすその雰囲気に、アミとラミは思わず見入っていた。
「俺の奥さんに見ほれてんじゃねぇよ」
じーっと女性を見ているミミニャミにＭＺＤが呆れたような、困ったような、怒っているような、ため息を吐きつつ、そんな複雑な口調で言った。
「おぉ、そうだった。ってか、奥さんすごい美人じゃん」
「ナイスバディだし」
アミとラミは、少年の反応とは対照的に、やけに嬉しそうだ。
「何で会わせてくれなかったの？」
「さては、美人を一人眺めてニヤニヤしてたんだなー。変態ー」
「違うっつの！」
アミとラミのからかいに、ＭＺＤはつい声を荒げた。
だが、ただ単に照れているだけだとわかっているアミとラミは気にしない。

「まぁ、そういうことにしといてあげるけどさ、そういえば奥さんの名前は何？」
アミがにやにやしながら少年を見つつ、女性の方にも声をかけた。
だが、女性は急に困ったような笑顔になった。
「名前はね……言えないの」
少年をうかがいながら、歯切れ悪く言った。
同時に、髪の毛もしゅんと垂れ下がる。
アミとラミは、じっとりとした視線を少年へ向けた。
「奥さんとは、どこで知り合ったの？」
「……」
少年は、口を結んで答えない。
「ねぇ、名前言えないってどういうことさ」
「この前言ってたよね。名前って、この世界で存在している証明だって」
「名前が言えないってことは、この世に存在してないってことにしたかった？」
「奥さんを私らに会わせるのも嫌がってたし……」
「だから、誰にも会わせないようにしてた？」
「つまり、それって……」
少年に言うというよりは、自分達の考えを確かめ合っているようにアミとラミは言い、やがて結論に至る。
「「……やっぱり神様、一人でニヤニヤ……」　」
「うるさい！」
アミとラミがじとりとした目で少年を見ると、少年はいたたまれ

なさに声をあげた。

「あ！　否定しない！　認めたよ！　この人！　やだー、神様変態とかやだー」

「外見は子供のくせに、やることえげつないんじゃない？！」

「一人でニヤニヤなんかしてない！　ってか、どさくさにまぎれて言いたいこと言ってんじゃねぇ！」

もう彼ら三人てんやわんやである。

女性だけが、その三人の様子を、楽しげに、にこやかに見ていた。

「まぁ、神の嗜好なんて私らにはどうしようもないから、いいんだけどさ。いや、しっかし奥さんかわいいねー」

とりあえず、アミとラミが落ち着いた。

「お前ら……」

少年は言葉も出なくなっていた。

しかし、ここでせっかくおさまったものを戻すのは面倒だったので、我慢することにした。

アミとラミはそんな少年には構わず、女性の観察を続ける。

「もうお前らいい加減帰れー！」

その日の神様宅は、賑やかだった。

どうおさめたかは、神のみぞ知る。

明日世界が滅びたら

「またスコア見てるの？」
「うん、まぁな」
家の居間に何枚もの紙を広げている少年に、＊＊＊は声をかけた。
「パーティー用のリミックスか何か？」
「いや、個人的趣味で見てるだけ」
「何？」
＊＊＊は少年の手元を覗き込みながら、そう言った。

「あ、クラシックだね。エムってクラシック好きだよねー。よくクラシックリミックスしたの、クラブでも流してたし。なんか珍しいなーと思ってたんだけど」
＊＊＊は、この世界の神の名前の頭文字をとって、少年のことをエムと呼んでいた。
音楽が全てを構成するこの世界では、神は音楽を操るものであった。
そして、音楽は人々の生活の一部であり、毎年毎年パーティーと呼ばれる祭りが全世界で開催されていた。
神でありながら、彼は実体化し、そのパーティーで世界の皆と祭りを楽しむのだ。

「そうか？　結構好きなヤツだっているぜ？」
「私の知ってるところではいなかったんだよね」
「まぁ、人それぞれだからな」
彼はスコアを見る手を止めない。
「このスコアは何の曲？」
少年の手にあるスコアを指さして＊＊＊は聞いた。
「ニュルンベルクのマイスタージンガー」

「あ、いつも口笛吹いてるヤツだ」
「なんだ、聞かれてたのか」
「あんないつも吹いてたら聞こえるよ。同じ家に住んでるのに」
「つい出ちゃうんだよなー。オリジナルもいいが、こういうのをガラっとイメージ変えるアレンジもいいんだよ」
「うん、なんかやたらテンポ速いなとは思ってたけど。ってか、原曲テンポちょっと遅いみたいだね」
「テンポ変えるだけで、クラシックじゃないように聞こえるのも、またぐっとくるんだよ」
少年は手を握りしめて熱をこめて語る。
「……変えるの好きだからって、突然世界変えるからとか言わないでね」

＊＊＊は笑いながら言った。
＊＊＊のその言葉に、少年は息をつめた。

「……なぁ……」

少年は突然声音を変え、少し間を置いて、聞いた。
＊＊＊は、次の言葉を待った。

「明日もし、世界が滅びるって言ったら、どうする？」

「それは、エムが壊すってこと？　それとも、滅びてしまう状況ってこと？」
少年の言わんとしているところを探るよう、＊＊＊は淡々と聞く。
「俺が世界壊しちまうようなヘマすると思うか？」
少年は冗談のように軽い調子で言う。
「じゃあ、エムが壊すってこと？」

「まぁ……そうなる、よな」
「エムがそうしたくてするんなら、別にいいんじゃないかな」
「随分あっさりしてるな」
少年は目を少し大きく見開いて、＊＊＊を見た。
「だって、きっと何か理由があるはずだもの。壊さない方法をいっぱい探して、でも見つからなくて、最後の手段ってことなんだと思う。そうなったら、どうしようもないよね。エムはこの世界を愛してるから、そんな滅多に壊さないって知ってるから」
「……もしかしたら、ただの気まぐれで壊したくなるかもしれないぞ」
「……それはそれで、いいんじゃないかな」
「いいか？」
少年は不審そうに眉をひそめた。
「そう思っていられるうちは、きっとそういうことにならないよ」
「まぁ、そうだな」
「何でそんなこと思ったの？」
＊＊＊の、少し優しさを帯びた声音に、少年は一呼吸おいて言った。

「この世界は、俺が作った。でも、完成したその時点で俺の手を離れて、もう勝手に動いて成長してる。だが、俺はこの世界の構造を知っているから、滅ぼそうと思えばいつでも滅ぼせるんだ。と思った時、もしかしたら俺は創った者の責任として、見るに見かねる状況になったら、この世界を滅ぼさなきゃいけない時もあるんじゃないか、もしくは、気まぐれで滅ぼしてしまいたくなる時がくるかもしれない、と思ってな」
「エムって、いつも前触れなく言い出すよね。いつもびっくりするよ」
＊＊＊はおかしそうに笑って言う。
「思ったこと口に出しちまうからなー、俺って」

「嘘つき」
「お前だって、人のこと言えた口か」
「じゃあ、お互い様か」
「そうそう」

「それにしてもさ、さっきの質問、子供のいる親に『自分の子供を殺さなきゃならなくなったら、どうする？』って聞くみたいなもんだと思うんだけど」
「実がないってことか？　確かにな。ちなみに、その質問に対するお前の答えは何なんだ？」
「そんなの決まりきってるから言わないよ」
＊＊＊の答えに、少年は思わず笑みを浮かべた。

――お前はいつも、俺の欲しい答えをくれる。

音楽家ごっこ

「最近、眠れないの」
「では、私が何か眠れるような曲をお作りいたしましょうか？」
「あら、本当？　じゃあ、お願いするわ」
彼女は目を閉じ、ベッドに横になった。
彼は部屋の中央にあるピアノに座ると、その指は静かに滑る。
その空間には、ピアノの調べだけが響いた。
窓が開いているため、月の光の差す窓から、調べが漏れていく。
曲が終わった時に、彼はベッドに横たわる彼女に視線を向けた。
彼女は仰向けになり、静かな呼吸をしていた。
「眠られたようですね」
確認の意味もこめて、小さく呟く。
彼女は変わらず、静かな息を繰り返す。
彼は、ピアノから立ち上がり、ゆっくりと彼女に向かって礼をした。
そして、なるべく音を立てないよう気を配りながら、部屋から出て行った。
それから3時間後、空がやや白み始める頃、彼女は一人の部屋で目を覚ました。

「はい、神様劇場でしたー」
「わー」
少年が軽く礼をすると、＊＊＊は拍手をした。
「……これで、いいか？」
少年は苦笑いを浮かべた。
「うん、楽しかった。ありがと」
「急だったから、ちょっと焦ったがな」

「それでもここまでやってくれるんだから、さすがエムだよね」
＊＊＊が言うと、少年もまんざらでもなさそうに笑った。
だが、そこで少年は視線を感じて、玄関の方をきっと見据えた。
「？」
少年が突然表情を変えたので、＊＊＊も何かと思い、少年の視線の先を見る。
「おい、お前ら、いつからそこにいた？」
少年が居間の入り口に向かって言った。

「あはは、バレてた？」
すると、アミとラミが気まずそうな笑みを浮かべて出てきた。
「バレてるっつの。ったく、覗き見するような真似しやがって」
少年は腕組みをして、不機嫌そうに言った。
「そんな怒ることないじゃーん。ははーん、さては奥さんとの甘い一時を見られたから、照れてんだなー」
アミがニヤリと笑って言った。
「アホか」
少年は呆れた表情をした。
「うわ、普通に言われた。すごいショックー」
「心にもないこと言ってんじゃねぇよ」
「せっかく来てくれたから、みんなで何かする？」

「「え」」
＊＊＊の言葉に、アミとラミは凍りついた。
「おぉ、そりゃいいんじゃねぇの。別にお前と俺の二人だけでやる必要ねぇからな。おもしろいんじゃねぇの」
少年は、皮肉たっぷりの笑みを浮かべて言った。
「い、いえ、結構です。お邪魔しましたー！！」
そう言うと、アミとラミは慌てて家から出て行った。
「？　どうしたんだろうね、二人とも」

「さぁてな」
少年は嬉しそうにニヤニヤ笑っていた。
「じゃあ、今度はベートーベンの真似しよう」
「まだやるのか……」
少年は、先ほどの笑みを途端に強張らせた。

【過去】神の名を呼ぶ人

「奥さんは神様のことをエムって呼ぶんだね」
ラミがふと何気なく言った。
「あぁ、まぁな」
少年も、何でもないことのように返した。
「なんか、きっかけとかあるの？」
アミが続けて聞いた。
そこで、少年は少し言葉に詰まった。
アミとラミも、いけないことを聞いただろうか、と息をつめる。
「……あぁ、じゃあ、聞かせてやろうか……」
少年は、張り詰めた空気を崩すように、表情を和らげて、話し始めた。

神の世界の創造がひと段落ついた後、少年は人間の体に宿り、自分の作った世界で生きていた。
そして、今、日本のクラブに通い、ＤＪをしようとしていた。
そのクラブでは、ＤＪバトルが行われていたため、それで勝ち進み、見事にクラブ専属ＤＪに選ばれたのだ。
十六歳ぐらいの少年にしか見えない彼が勝ち、その場にいた者は驚いた。
しかし、それを納得させる実力と、有無を言わせない迫力を彼は持っていた。
少年は、一旦、ＤＪブースから下り、休憩に入ることにした。
そのまま、カウンターの椅子に座る。
カウンターの位置が、このクラブの雰囲気を見るのに良い位置だった。

「お前、名前は何ていうんだ」
少年が席につくと、カウンターにいたマスターが聞いた。
「言っただろう。神だって」
少年は、ステージに上がった時に聞かれた時に「俺に名前はないが、皆は神と呼ぶ」と言い、会場の失笑をかった。
「……なるほどな」
マスターは、それ以上聞くことはやめた。
今の少年には、神という言葉がしっくりくるように感じられた。
それ以来、彼は「神」と呼ばれるようになる。

「……なぁ、マスター」
カウンターで軽めのカクテルをもらい、部屋中に広がる音に身を委ねながら、ゆっくりと飲んでいた少年が、ふと違和感に気づいて、マスターに声をかけた。
彼の視線の先には、十三歳ぐらいの少女がいた。
黒い潤いのあるを短くして、男性給仕の制服を着ていた。
だから、もしかしたら少年なのかもしれない。
だが、少年には、その人物が少女に見えた。
そして、その少女に、他の人間にはないものを感じた。
いや、むしろ少女には他の人間にあるものがなかった。
少女には、「存在感」がなかった。

「あいつの名前は、何て言うんだ？」
少年は、その少女に興味を持った。

「よう」
少年は、クラブの裏でゴミの片づけをしていた少女に声をかけた。
少女は、ゴミ袋を持ったまま、少年の方を見た。
その顔は、なぜ声をかけられたのだろう、という疑問で満ちていた。

「俺は、ちょっとＤＪしてる者だ」
「知っています。ＤＪバトルで勝った人ですよね」
少年の言葉にも、少女は抑揚なく返した。
一応笑みを浮かべていたが、どことなく力なかった。
「あぁ、知ってたか。これからたぶん、ここに来ることになるから、よろしくな」
「はい」
相変わらず、その表情は変わらない。
「お前の名前を聞いてもいいか？」
「はい。私は＊＊＊といいます」
「＊＊＊……か。覚えておく」
少年は、満足そうに笑みを浮かべた。
＊＊＊は、やはりどういう意味があるのかわからない、という顔で、少年を見ていた。

それから、少年は＊＊＊によく話しかけるようになった。
この世界を創造した神として、世界のほころびのような存在は見逃せなかった。
なぜあのような存在の薄いものができてしまったのか。
それを少年は知りたかった。
そう、最初はその理由だけだった。

「ねぇ、あなたは何か名前はないの？」
ある日、＊＊＊はそう言った。
最初は警戒していたようであったが、何回か話しかけるようになると、打ち解けたのか、口調も砕け、笑顔もたまに見せるようになった。
「あぁ、俺は基本的に名前に縛られないからな」
＊＊＊が通路の掃除をしている側で、少年はそれを見ながら、＊＊＊に話しかけていた。

「名前はないの？」
「あぁ。なにせ俺に名前をつけて呼んではいけないことになってるからな」
少年は壁にもたれて、おもしろいことでも言うような口調で言った。
「ふーん」
＊＊＊は、少年が何をそんなにおもしろがって言うのかわからないが、とりあえず返事をした。
「でも呼ぶのに不便だから、私はエムって呼ばせてもらうね」
そして、何でもないことのように、言った。
少年は、少し驚いたように、目を見開いた。
＊＊＊は何でもないように言ったが、今までそのようなことを言った者はいなかった。
だが、少年はそれもおもしろい、と感じた。
ニヤっと口の端を持ち上げる笑みを浮かべた。

「……あぁ、いいぞ」

それから、＊＊＊は少年をエム、と呼ぶようになった。
そしてこれが、彼らの関係に、変化の訪れる兆しであった。

ＲＡＮ　＊＊＊２００７／１０／１４＊＊＊

Black and White

「あれ、来てたの？」
＊＊＊は、玄関に立つ服装から髪から、何から何まで黒い少年に気づき、声をかけた。
その少年の容姿は、神と呼ばれる少年に似ていた。
しかし、＊＊＊の前での少年よりも、少し幼い。
＊＊＊の前での少年は、十八歳ぐらいではあるが、黒い少年は十三歳ほどの容姿であった。

「……」
黒い少年は黙って＊＊＊を見ていた。

「黒いエムだね。よかったら、あがっていかない？」
＊＊＊の笑顔の呼びかけにも、黒い少年は動こうとしない。
「……何で、お前なんだ」
そして、黒い少年は低く、小さく呟いた。

「ん？」
＊＊＊はよく聞き取れず、黒い少年に近づいた。
だが、黒い少年は素早く離れた。

「お前は俺が怖くないのか。お前を殺そうとしてるヤツなのに」
黒い少年の口調は苛立っていた。
「あなたは、何だか怖い感じがしないから」
「お前を消そうとしてるんだぞ、俺は」
そこで、＊＊＊は一呼吸置いて、静かな声音で言った。
「……消えることは怖くないよ。だって、私、本当は存在してないんだもの」

「！」
黒い少年は、一瞬言葉につまった。
「あなたも、だから私を消したいんだよね？」
「……」
黒い少年の周りには重い沈黙が漂うのに、＊＊＊の周りは、優しげな空気が流れていた。
「私は、この世界の一部として生きていられただけで幸せなんだよ」
「……何で、あいつはお前に執着するんだろうな」
黒い少年の口調が、少し変わった。
＊＊＊は、あえてそれに気づかないフリをした。
「エム？　でも、エムは私だけを見てるわけじゃないよ。みんなのことを見てるし、愛してる。私もそう。だって、彼と私は一緒の世界にいるから。一緒の世界にいるから、少し近しい気持ちになれるだけだよ。あなたも、本当は私達と一緒なんだよ。本当は、エムとわかり合えるはずなんだよ。だって、あなたも世界を愛してるから」
「だが、俺はあいつとわかり合える気はしない。あいつは光に位置して、俺は影の世界に位置してるからな」
「エムもそう言ってた」
黒い少年が急に冷たい調子になり、そう言い放つと、＊＊＊は笑顔を切なげに歪めた。
「でも、あなた達はとてもよく似ているよ。光と影がそうであるように。どちらもないとこの世界は成り立たないからね」
「お前は、どっちなんだ？」
「私？　私はこの世界の一部なだけ。どちらにも属していない」
「やっぱりお前は変なヤツだ」
「ありがとう」
黒い少年は、眉を歪めてそう言った。

＊＊＊は、おかしそうに笑った。
しかし、黒い少年も、その笑顔につられるように、少し顔をほころばせた。
「だからこそ、あいつはお前を選んでいるのかもしれない」

ＲＡＮ　＊＊＊２００７／１０／１４＊＊＊

かわいい人

ふと気づくと、目の前に黒い少年が立っていた。
＊＊＊は、ソファに座ったまま、笑顔で彼を迎えた。
しかし、黒い少年は、＊＊＊を睨みつけて、立ったままだ。

「どうしたの？　立ってないで、そこに座って」
＊＊＊は、黒い少年に近寄り、その後ろへ回る。
黒い少年は一瞬大きく体を震わせて、振り返ろうとした。
だが、＊＊＊は黒い少年の肩を掴み、ソファへと導き、座らせた。
黒い少年は、なすがままにソファに座った。
とても不服そうな顔をしていた。
黒い少年は座ったが、＊＊＊は黒い少年から離れようとしない。
黒い少年は不審に思い、また振り返ろうとしたが、＊＊＊は黒い少年の首に腕を回して、抱きついた。

「小さいエムは、かわいいなー」
さらに、腕に力をこめて、黒い少年を抱きしめた。
黒い少年は、抱かれたまま固まってしまった。

「ただいまー」
そこへ、少年が帰宅した。
そして、リビングにいる＊＊＊と黒い少年を見つける。
「何やってんだよ」
少年は、やや不機嫌そうに言った。
「いやぁ、小さいエムってかわいいな～と思って」
＊＊＊は笑顔で言った。

「なんだよ。それなら、これでどうだ」

ＭＺＤは、そう言うと、指をパチンとはじく。
一瞬にして、その姿は、十八歳ぐらいのものから、黒い少年と同じぐらいの十三歳ぐらい少年の姿になった。
「どうよ」
少年は、ニヤリと笑って、＊＊＊に示した。
だが、＊＊＊は不満そうな顔をした。
「うーん、なんかそういうのじゃなくてね」
「難しいな。何がだめなんだよ」
少年は、脇腹に手をついた姿勢で聞く。
「なんかこう、初々しさ、だよね」
＊＊＊は、黒い少年の頭をポンポンと軽く叩きながら言う。
「あぁ、そりゃ無理だな」
少年は、苦笑いを浮かべた。

＜オマケ＞
少年「それにしても、お前いい加減離れろよ。何なら、俺が抱っこしてやってもいいんだぜ？」
黒い少年「絶対いらない！！」
少年「何だよ。＊＊＊の時はおとなしかったくせに」
黒い少年「～～～～～～！！」
少年「あ、消えやがった。ったく、都合いいように自分の力使うから、困ったもんだよ、あいつは」
＊＊＊「エム、絶対楽しんでるよね？」
少年「バレたか」

【過去】Have a close connection

その日は、大降りの雨が降っていた。

少年は、店の路地裏で、倒れこんでいた＊＊＊を見つけた。

嫌な予感がして、＊＊＊に急いで近づく。

「おい！」

少年は、倒れている＊＊＊の肩をつかんで、声をかけた。

＊＊＊の服はところどころはだけ、ボロボロになっていた。

＊＊＊は、気づいたのか、薄く目を開けて、少年の方を見た。

「エ、エム……？」

「とりあえず、俺の家に運ぶからな！」

＊＊＊が気づいたのを確認すると、少年は＊＊＊を抱きかかえて、宙に浮いた。

そして、そのまま、自宅へと向かった。

少年は、見えないバリアを自分の周りに張っているので、雨はそれを避けて地上に降り注ぐ。

自宅に着いた少年は、とりあえず客間として機能している部屋にあるソファに、＊＊＊を横にした。

「今、毛布とか、温かいもの持ってくるからな」

そして、少年は毛布を＊＊＊の側に置いた。

次に、お湯でもわかそうかと思ったが、その前に気づいた。

毛布を持ってきたはいいが、濡れた服を着替えさせなくては、意味がない。

少年は、恐る恐る＊＊＊に声をかけた。
「……おい……起きて、着替えられる、か？」
「……うん……」
そう答えると、＊＊＊はソファからゆっくりと起き上がった。
とりあえず、＊＊＊の服は、適当にワンピースでも出してみることにした。
彼はこの世に存在するものなら、どこかから引っ張ってくることができた。
「あー……毛布でもかぶって、着替えろ」
「うん……」
＊＊＊は弱々しい返事をして、空間から出てきたワンピースを受け取り、毛布にくるまって、ごそごそと着替え始めた。
少年は何となく気まずくなり、さっさと後ろを向いて、温かい飲み物でも用意することにした。

＊＊＊が着替え終わったのを見はかり、少年は温めた牛乳をマグカップに入れて、持っていった。
「これでも飲め」
＊＊＊は、どこか力のない目で、少年からカップを受け取った。
湯気をたてている牛乳をしばらく見つめていると、やがてその顔が柔らかな笑顔に変わる。
「ありがとう……」
そう言うと、＊＊＊は少しずつ、牛乳に口をつけて、飲んだ。
少年は、その様子を、ほっと安心した笑顔で見ていた。

飲み終わると、＊＊＊はカップをテーブルに小さな音をたてて置いた。
「なんか眠くなってきた」
＊＊＊は、下向き加減に、うっとりとした表情で、言った。

「眠くなったら寝ろ。今日はここに泊まっていいから」
少年は、＊＊＊の斜め前の椅子に腰をかけていた。
「でも、まだ眠りたくない。エムがいるから。エムといる時間はとっても楽しい。少しでも逃したくない」
＊＊＊は、眠そうな目は下に向けたまま、そう言っていた。
笑顔で言われてしまったので、少年は、何とも言い返せなくなった。
「好きにすればいい」
こう言うことしかできなかった。
「それにしても、おもしろい家だね。あちこちがまっすぐになってるかと思えば、ぐにゃぐにゃしてる。こんな広いのに一人で住んでるの？」
＊＊＊は、ソファの背もたれによりかかって、部屋を見渡しながら、そう言った。
「たまに客は来る」
「エムは友達いっぱいいるもんね」
「友達……ってわけじゃないんだがな」
「でも、エムはみんなをとても優しい目で見てるよ。口は悪いけど」
「……」
少年は黙るが、＊＊＊は構わず続けた。
「でも、たまに私のことは悲しい目で見るよね。……私が、かわいそうだから？」
「違う。お前よりかわいそうなヤツなんかいっぱいいるし」
このような言葉を＊＊＊に言わせてしまうことに、少年は心が痛んだが、それは表に出さないようにして、あくまでいつもの調子で答えた。
「そうだよね。エムははっきり言ってくれるから好きだよ」
＊＊＊は、大して気にした様子もなく言った。
「……」
少年は、また口を閉じた。

「ほら、また辛そうな顔してる。……私と一緒にいるのは、辛い？」
＊＊＊は相変わらず、世間話をするような、さりげなく口調だった。
しかし、少年はゆっくりと立ち上がり、＊＊＊の前へ歩くと、そこにひざまずいた。
そして、＊＊＊の両手を力強く両手で包み込んだ。
「俺はお前が……あー……何だかわからんが、とにかく、気になるんだ。いたいから一緒にいる、そんだけだ」
少年は、何とも歯切れ悪く、そう言った。
＊＊＊は思わず笑顔がこぼれた。
「じゃあ、エムは私と一緒にいたいと思ってくれてるんだ？」
その声は嬉しそうにはずむ。
「あぁ」
少年も、その＊＊＊の声に安心したのか、笑顔で答えた。
「嬉しい。ありがとう」
「……」
少年は、ただ＊＊＊の笑顔を見つめる。
「今日は、ずっと私の側に、いてくれる？」
「……あぁ」
そう言うと、少年は立ち上がり、＊＊＊の横に座った。
＊＊＊は、少年の肩に頭をのせた。
少年は、＊＊＊の頭に手をのせ、優しくなでる。
「温かい。私、今までこんな温かい誰かの側にいたことなかった……」
「……」
少年はただ黙って、＊＊＊の頭をなでていた。
「あれ、エム、寝ちゃった……？」
少年の手が止まると、＊＊＊はそのままの姿勢で、小さな声で問う。

返答は、ない。
「そうか、それじゃあ、寝ようか……」
そう言うと、＊＊＊は静かな寝息をたて始めた。
少年は、目を開け、その目だけを動かして、＊＊＊を見た。
安心したように、眠っている。

――誰にもこいつは汚させない。
少年は、今までに感じたことのない、強い思いを感じていた。

次の日の朝、少年は目覚めた。
しかし、隣に昨日までいたものの気配がない。
慌てて、部屋から出ると、何やら良い匂いがしてきた。
少年の家は、毎日部屋の構造が変わる。
今日はキッチンは隣の部屋に移動したらしい。
キッチンに入ると、＊＊＊がいた。

「あ、エム、おはよう。ご飯できたよ」
＊＊＊が、キッチンからこちらを振り返り、笑顔でそう言った。
「よく台所の場所がわかったな」
「え？　うん、何となく。お腹減っちゃったから、勝手に借りちゃった。ごめんね」
「いや、いいんだけど。自分がいても、あんまり使わないからな」
「何？　不摂生な生活してたらダメだよ。今日はちゃんとご飯作ったから、食べてね」
そう言うと、＊＊＊はキッチンの隣にあるダイニングテーブルに食事をのせた。
白いご飯、味噌汁、酢の物、焼き魚が用意されていた。
「話があるんだ」

だが、少年は、食事が始まる前に言おうと、切り出した。
「何？」
キッチンからダイニングに＊＊＊が出てきて、少年の方を向いた。
「俺と、結婚してくれないか」
そう言って、＊＊＊の前に、指輪を差し出した。

――これで俺は捕われる。
その行為には、少年のただならぬ覚悟も込められていた。

「本気で言ってるの」
＊＊＊は目を大きく見開いて、少年を見た。
その声は、少し低かった。
少年の行為の重さを、無意識に感じ取ったのか。
「あぁ」
それに答える少年の声も、重い。
「神様が結婚なんてしていいの」
と、＊＊＊は笑いながら言う。冗談でも言うように。
「俺は自由に生きてる。この世界に生きてる奴らもだ。俺がこの世界を作り上げた瞬間に世界は俺の手から離れ、好き勝手に動いてる。俺はその世界のでき方を知ってるから、少しいじれるだけだ。それ以外は何も変わらない。だから、この世界の全てのものが自由なら、俺も自由だ」
しかし、少年は変わらず真剣な口調だ。
少年は、自分の手に指輪をはめた。
そして、＊＊＊の手にも指輪をはめさせる。
「お前が、俺と結婚してくれるのなら、この指輪に誓ってくれ」
少年は、手の指輪を顔の前に出す。
少年の様子に、＊＊＊も表情を引き締めた。
そして、ゆっくりと手を持ち上げ、少年の指輪に自分の指輪をこすり合わせた。

これで、誓いは成立した。

――俺の側にくること、それは世界と同化すること。俺は生まれもったものだから、力を与えられているが、こいつは完全に同化してしまう。世界に溶け込んでしまう。

少年は、その途端、視線を伏せた。

すると、奥さんは伏せた彼の目に両手を差し出し、その目を覆った。

「私がこの手でエムの涙を受けとめてあげる」

「涙なんか出ないさ」

少年は自嘲気味に言った。

「嘘。今までだっていっぱい泣いたじゃない。雨は、神様の涙なんでしょ？」

「……」

＊＊＊の言葉に、少年は何も言えなくなった。

「私達、結婚、したんでしょ？」

その言葉だけで、少年がどれだけ勇気付けられたか、きっと言った本人でさえ知らないだろう。

＊＊＊がその言葉を言った途端、外からたくさんの雨粒が地面に当たる音が聞こえてきた。

ＲＡＮ　＊＊＊２００７／１０／１４＊＊＊

コスプレ

「おーい。今日はお客さんがいるぞ」
少年がドアを開けて、家の中へ入ってきた。
「そうなの？　どちらさま？」
＊＊＊は笑顔で言い、言われて興味深そうに少年の後ろを覗く。
「デザイナーのピエールとジェームズだ」
ＭＺＤがそう言うと、後ろから動物の着ぐるみ着た小人が出てきた。
「へぇ～、かわいい」
＊＊＊はしゃがみこんで、ピエールとジェームズを見る。
「いやいや、こう見えても、こいつらは有名なデザイナーなんだぞ」
しかし、＊＊＊は少年の話を聞いていないようで、ひたすらピエールとジェームズと楽しそうに戯れていた。
「エムって、なんか小さいものに好かれるよね～」
そして、笑顔でそう言い放ってくれた。
「……」

「こんにちは～、神……はいますね。お邪魔します」
そこへ、開いていたドアから、犬耳の帽子をかぶった少年シロが入ってきた。
彼は少年の補佐をする役割をしている、世界の調停者である。
「ん、まだお客さん来るの？」
「あぁ、今日は打ち合わせがあるんだ。後からアミとラミも来るから」
「今日はお客さんがいっぱいで楽しいね。さぁ、どうぞどうぞ」
「お邪魔しますー」
シロ達が家に上がろうとすると、少年はシロの帽子の耳をひっぱった。

「いだ！　何するんですか！」
「帽子だから痛くないだろ」
「そういう問題じゃありません。何怒ってんですか？」
「別に」
明らかに怒っているだろう少年の言葉に、シロは訳がわからないという風に首をかしげた。

「ところで、ピエールとジェームズ達は何をするの？」
＊＊＊がお茶を皆に出しながら、少年に聞いた。
少年は＊＊＊からお茶を受け取りながら答える。
「あぁ、アミとラミの衣装を作ってもらおうと思ってな。今日はその打ち合せをするんだ」
「なるほど。コスプレするって言ってたしね」
「まぁ、そういうこと」
「いいな～。私もコスプレしたいな」
「えぇ～？！」
思わずその場にいた全員が声をあげてしまった。

「よし、ピエール、ジェームズ、アミとラミが来る前にちょっとやってみよう。着物作れるか」
しかしＭＺＤはすぐに切り替えて、ノリノリでそう言い始めた。
「むり～」「むり～」
ピエールとジェームズは頭を大きく振って答えた。
「無理じゃねぇ！　材料なら出してやるから！　やれ！　っていうか、やってくれ！」
しかし少年は容赦がなかった。
「エム……？」
＊＊＊は少年の気迫に、戸惑った表情を浮かべていた。
千代は、少年の悪い病気が始まった、と思っていた。

それからしばらくして、アミとラミが少年宅に到着した。
「神様〜、アミとラミ来ました〜……って何やってんの？！」
「奥さん？！」
家の中に入ると、目の前には、鮮やかな色の着物を着た＊＊＊がいて、アミとラミは思わずのけぞって、その場に立ち止まってしまった。
「今日は私らの衣装の打ち合せだよね？　何で奥さんが衣装着てるの？！　しかもいい着物っぽいんだけど！　これ！」
「いや、こいつが着たいって言うから」
「いや、明らかにこれはやりすぎだよ。着せる方もめっちゃノリノリでしょ」
「とりあえず、きれいだろ？」
「きれいだけど……」
「その満足気な笑顔が腹立つ」
「ピエールとジェームズが作ってくれたんだ。きっとお前らのもいいのができあがるぞ〜」
「まぁ、そうだろうね……」
「もっとお前ら遅く来てもよかったのに」
「どんだけコスプレさせる気だったのさ」
「お前らより絶対こっちの衣装作った方が有意義な資源活用になるって。よし、次セーラーな！」

「このエロ神がー！」
「シロ君止めてよー！」
「無茶言わないでください！！　っていうか何で僕？！」
シロはもう半分泣きそうだった。

「むりー」「むりー」
ピエールとジェームズは、またも抑揚なくそう答えていた。

RAN

****2007/10/14****

神の共演

「あ、なんか神様とグランドが話してる」
アミとラミが、ちょうど通りかかった。

「♪♪♪♪♪♪♪」
「♪♪♪♪♪♪♪」
ピアノの奏でる音色が、辺りに響き渡っていた。
だが、それは明らかに、少年の口と、グランドというピアノに魂が宿り、動くようになった彼から発せられているようだ。

「は、話してるん、だよね……？」
「た、たぶん……？」
アミとラミは、少年とグランドに近づいた。

「神様ー、どうかしたの？」
「おぉ、お前らか。いやぁ、今グランドに頼んでたトコなんだよ」
「何を？」
「これ弾かせてくれって」
少年は手に持っていた楽譜を、アミとラミに差し出した。
「Ｉ　ｇｏｔ　ｒｈｙｔｈｍ　？」
それを受け取り、ラミはタイトルを言った。
「ジャズじゃん。グランドは好きなんじゃないの？」
アミはそれを横から覗き込み、次に少年とグランドを交互に見た。
「♪♪♪♪♪♪♪！」
グランドは大きな不協和音を奏でた。
思わず、アミとニラミは顔をしかめた。
「いやぁ、前のパーティの時に弾いたアレは、実は俺が頼み込んだんだ。本当はこいつはクラシックが好きでさ～。あと、人に弾かれ

るのはすごい嫌みたいなんだ」
「またなんで、そんな無茶なお願いを……」
アミとラミは、呆れたと言わんばかりの表情を見せた。
「だって、こいつの音抜群なんだぜー！」
「神様って時々子供みたいなワガママ言うよね～」
アミは呆れて、ため息をついた。
「で、やろうやらないの問答が続いてると」
ラミは冷静に言った。
「いいじゃんかよー、なー」
「そしてその問答を続けるのかい」
ラミはもう呆れて、ただ見守るだけしかできなかった。

「♪……」
そして、ついにグランドは渋々ながら、承諾した。
「……何だかんだ、神様のお願いに逆らえた人っていないよねー」
アミとラミの表情は、もう苦笑とも皮肉ともつかない笑みになっていた。
「よっしゃー！　ありがとう！　グランド！　お礼に、いいもん見せてやっからな」
少年は拳を握り締めて言うと、どこからともなく椅子を取り出した。
グランドは少年の前に落ち着く。
そして、少年の指は、グランドの鍵盤に滑り下りた。
アミとラミも、その瞬間を息をのんで見ていた。

そして、はじき出された音は、軽快に宙を舞い始める。
かわいらしくはじけもするが、逆に重々しく響く音色もあった。
十本の指でしか鍵盤には触れていないのに、様々な音色が聞こえる。
その奏でる指は、優雅に素早く動き、まるで転ぶようだった。

「！！」
そして、アミとラミは、少年の様子が少しおかしいことに気づいた。
いや、少年は何も変わらないのだが、彼の後ろに何か別の影が見えた。
白い光に包まれ、その姿をよく見ることはできなかったが、燕尾服を着た優雅な姿勢を保つシルエットだけは見えた。
そして、演奏が終わると、そのシルエットは消えた。
「神様！　なんか後ろに変なの見えた！」
「変なの言うな。あれはグランドの元の主なんだぞ」
「え！　そうなの！？」
「あぁ。有名なピアニストだったんだが、病気で随分昔に亡くなったんだ」
「もしかして、その人に会わせてあげるために……？」
「え？　別に知らねぇし。俺が弾いてたら、勝手に下りてきただけだろ」
「だって、いいもの見せてやるって言ってたじゃん」
「知らねぇなー」
そう言うと、少年はそれ以上の追求を避けるように、宙へ逃げた。
「ありがとうな、グランド」
そして、空へと去っていった。
「もう、素直じゃないんだから」
「まぁ、そんなもんだよね」
「グランドは、ご主人に会えて、よかった？」
「♪♪♪……」
グランドは、切なげな響きを含みつつも、優しい音色を奏でた。

アミとラミには、何を言っているかわからないが、きっとＭＺＤのはからいに感謝しているのだろう、ということは、何となく伝わった。

ＲＡＮ　＊＊＊２００６／１０／１４＊＊＊

双子の神様

「神様ー、遊ぼー」
公園の芝生に少年が横たわっていると、それに覆いかぶさる影があった。
少年は、顔にかぶせていた帽子を取り、声の主を確認した。

「なんだ、双子か」
「何だとは何よ。それに私達双子って名前じゃないわよ」
姉の方が頬をふくらませた。
「あぁ、悪い悪い。で、何？」
少年は帽子をかぶりながら、全く悪びれた様子もなく、起き上がって二人を見た。
茶髪の、全く同じ顔をした女の子と男の子が少年の前にいた。

「遊ぼうって」
「何だ、暇なのか」
いつもは、二人で何かをして遊んでいる。
少年にわざわざ声をかけるということは、遊びの種もつきた、ということだろう。
「うん」
予想どおりの返事を、二人はした。
「しかし、俺も何をしたらいいんだか、さっぱりだな。……お前ら、いつもの楽器持ってるか？」
「これ？」
そう言うと、双子は、それぞれの楽器を取り出した。
おもちゃのピアノと、トランペットだ。
「それ使って、なんかするか」
「何するの？」

「楽器ですることなんか一つだっつーの！」
そう言うと、少年は指をはじいた。

すると、双子の手にあったピアノとトランペットは空に浮かび、とてもそれらだけで奏でているとは思えないような音色を奏で始めた。

双子は、ぽかんと口を開けて、その様子を見ていた。
だんだんと音楽が盛り上がってくると、ピアノとトランペットは、自由自在に宙を飛び回る。
双子の目には、その軌跡に、小節が見えていた。
その時の双子の顔は、笑顔に輝いていた。
そして、音楽が終わると、ピアノとトランペットは、地面にゆっくりと下りた。

「すごいすごい！」
双子は喜んで、拍手を少年に贈った。
「楽しかったか？　今度は、お前らがこれぐらいできるようになれよな」
少年は口の端を持ち上げて、言った。
「空は飛べないよ」
弟の言葉に、少年は思わず表情を崩し、声を上げて笑った。
「いや、そこまでは期待してないから。弾けるようになれってこと。お前らには才能がありそうだからな」

「うん、できるようになったら、神様に聞かせてあげるから」
「そうしたら、神様も元気になる？」

弟の言葉に、少年は表情を一瞬強張らせた。
だが、すぐに元に戻す。しかし、笑顔はどこか落ち着いたものになっていた。

「俺、元気ないように見えたか？」
「そういう風にも見えたし、僕らも感じ取ったんだ」
「何かが消えた気がしたの」
弟の言葉を、姉が引き継いだ。
少年は、双子達を驚いたように見つめていたが、また元の静かな笑顔を浮かべた。
「そうだな。お前らの音があれば、埋められるかもな」
「あたし達、頑張るから！」
「僕も！」
姉が笑顔で握りこぶしを作る。弟も同じように、姉を見て、少年を見て、言った。

「あれ、神が双子達と一緒にいるよ」
「あぁしてると、いい人に見えるんだけどねー」
ちょうどアミとラミが通りがかり、穏やかな笑みを浮かべながら、ため息まじりに言う。

「こら、そこー。聞こえてるぞー。お前らも暇なら付き合えー」
そんなアミとラミを少年が逃すはずもなかった。
アミとラミは、苦笑いを浮かべながら、少年達に近づく。
何をして遊んでたの？などという会話が、また始まった。

――エムは、小さいのに好かれるよね。
ふと、愛しい者の声を、少年は思い出していた。

ＲＡＮ　＊＊＊２００７／１０／１４＊＊＊

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2442t/

the world for you

2011年8月7日03時15分発行